「時の仕事、自分でせなならん」

私たちのホーム任運荘の五月祭で、目をひいたものの一つが、高齢者五十人の「自分史」の展示であった。

すっかり弱っているので、自分で書いた人は三人。寮母に聴き書きさせた人が三十六人。残る十一人は意識薄明状態で寮母が代わって組写真で表現。最高齢九十九歳の古庄トミさんは夫に二十年前死別、わが人生をふり返って。

「…なんちゅうてん一番せつかったんは、子供が戦死を二人したこと、一番せつかった。婿さんに死なるるより、子供ん死んだ方がもっとせちいで。その間、〝うれしいでえ〟と思ったことは一つもねえ。…子供が死んじ、自分は何のために生きちょるんじゃろうか、なんぼ自分も死んだ方がいいかと思うで。一番かわいいのは子供じゃろうなあ。

人間はなあ、せつかったり、うれしがったりするのが、時の仕事じゃ。一人一人の持ち前の苦しみというもんは自分でせなならん。自分がせついからと日々日々のこと

を、人に白状してんつまらんじゃろう。心の芯(しん)じ、こらえるのが人間じゃ。こらえるのが人間のつとめ、他人にせつい顔みせちゃならん。時、時に、その苦を捨てるのが人間というもんで。

ここんしのごやっかいになっちからは、なーんもきちいことは、もうねえですわ…」。

古庄さんは今肺ガンの末期。肺の苦痛に耐えながらのこの平安静謐(ひつ)さ。計り知れない深いものを、私はここに見る。毎朝の日課—車いすに移してもらい、自力で玄関前の観音像に額(ぬか)ずく。ひっきょう、人間とはおつとめと共にある存在、そう教えやまない。深夜おむつを換える寮母に、開けられない瞼(まぶた)を指でおし開き「あんた、おさかしいですな。おおきに。なむあみだぶつ…」。合掌して目を閉じる。瞼に去来する面影は…。

（一九八九年五月三十一日）